

科目名	生体防御機能解析学演習				分野・必選別・単位数	専門科目 (臨床検査技術学)	選択	2単位
科目責任者	◎教授 鈴木幸一 教授(兼) 榎村浩一 講師 黒田雅頭						科目ナンバー	T4C116
課程	博士前期	配当年次	2年	配当学期	通年	授業方法	演習	
授業の概要	生体防御機能解析学講義において修得した知識をもとに、免疫応答が問題となる症例やさまざまな文献調査をとおして、応答生体防御反応のパターンとバリエーションを学ぶとともに、診断に役立つ検査方法の最先端と問題点を理解することを目指す。それとともに、抗体、補体、細胞性免疫などを介する多様なアレルギー疾患の診断の改良や開発、輸血や移植の際に起こる拒絶反応を防ぐための適合性検査など、新しい方法や技術の開発をめざす。							
授業の到達目標	①自然免疫分野の文献を調査できる。免疫系の異常を伴う疾患のうち、検査技術の点で注目されるものについて、新しい文献を調査できる。 ②応答生体防御反応のパターンとバリエーションを学ぶとともに、診断に役立つ検査方法の最先端と問題点を説明できる。 ③抗体、補体、細胞性免疫などを介する多様なアレルギー疾患の診断の改良や開発、輸血や移植の際に起こる拒絶反応を防ぐための適合性検査など、新しい方法や技術の開発について説明できる。							
授業計画	回数	担当者			行動目標			
	1	鈴木 幸一	教授		自然免疫分野の文献を調査できる。免疫系の異常を伴う疾患のうち、検査技術の点で注目されるものについて、新しい文献を調査できる。①			
	2	鈴木 幸一	教授		自然免疫分野の文献を調査できる。免疫系の異常を伴う疾患のうち、検査技術の点で注目されるものについて、新しい文献を調査できる。②			
	3	鈴木 幸一	教授		自然免疫分野の文献を調査できる。免疫系の異常を伴う疾患のうち、検査技術の点で注目されるものについて、新しい文献を調査できる。③			
	4	鈴木 幸一	教授		自然免疫分野の文献を調査できる。免疫系の異常を伴う疾患のうち、検査技術の点で注目されるものについて、新しい文献を調査できる。④			
	5	榎村 浩一	教授(兼)		生体防御機能解析学講義において修得した知識をもとに、免疫応答が問題となる症例やさまざまな文献調査をとおして、応答生体防御反応のパターンとバリエーションを学ぶとともに、診断に役立つ検査方法の最先端と問題点を説明できる。①			
	6	榎村 浩一	教授(兼)		生体防御機能解析学講義において修得した知識をもとに、免疫応答が問題となる症例やさまざまな文献調査をとおして、応答生体防御反応のパターンとバリエーションを学ぶとともに、診断に役立つ検査方法の最先端と問題点を説明できる。②			
	7	榎村 浩一	教授(兼)		生体防御機能解析学講義において修得した知識をもとに、免疫応答が問題となる症例やさまざまな文献調査をとおして、応答生体防御反応のパターンとバリエーションを学ぶとともに、診断に役立つ検査方法の最先端と問題点を説明できる。③			
	8	榎村 浩一	教授(兼)		生体防御機能解析学講義において修得した知識をもとに、免疫応答が問題となる症例やさまざまな文献調査をとおして、応答生体防御反応のパターンとバリエーションを学ぶとともに、診断に役立つ検査方法の最先端と問題点を説明できる。④			
	9	榎村 浩一	教授(兼)		生体防御機能解析学講義において修得した知識をもとに、免疫応答が問題となる症例やさまざまな文献調査をとおして、応答生体防御反応のパターンとバリエーションを学ぶとともに、診断に役立つ検査方法の最先端と問題点を説明できる。⑤			
	10	黒田 雅頭	講師		抗体、補体、細胞性免疫などを介する多様なアレルギー疾患の診断の改良や開発、輸血や移植の際に起こる拒絶反応を防ぐための適合性検査など、新しい方法や技術の開発について説明できる。①			
	11	黒田 雅頭	講師		抗体、補体、細胞性免疫などを介する多様なアレルギー疾患の診断の改良や開発、輸血や移植の際に起こる拒絶反応を防ぐための適合性検査など、新しい方法や技術の開発について説明できる。②			
	12	黒田 雅頭	講師		抗体、補体、細胞性免疫などを介する多様なアレルギー疾患の診断の改良や開発、輸血や移植の際に起こる拒絶反応を防ぐための適合性検査など、新しい方法や技術の開発について説明できる。③			
	13	黒田 雅頭	講師		抗体、補体、細胞性免疫などを介する多様なアレルギー疾患の診断の改良や開発、輸血や移植の際に起こる拒絶反応を防ぐための適合性検査など、新しい方法や技術の開発について説明できる。④			
	14	黒田 雅頭	講師		抗体、補体、細胞性免疫などを介する多様なアレルギー疾患の診断の改良や開発、輸血や移植の際に起こる拒絶反応を防ぐための適合性検査など、新しい方法や技術の開発について説明できる。⑤			
15	黒田 雅頭	講師		抗体、補体、細胞性免疫などを介する多様なアレルギー疾患の診断の改良や開発、輸血や移植の際に起こる拒絶反応を防ぐための適合性検査など、新しい方法や技術の開発について説明できる。⑥				
事前事後学修の内容およびそれに必要な時間	【事前学修】	次回授業部分の資料を事前に読んでおくこと。 回次の授業内容を予習し、用語の意味等を理解しておくこと。						
	【事後学修】	授業中の疑問点をまとめ、関連する文献等を利用し、次回授業までに解決しておくこと。						
	【必要時間】	当該期間に30時間以上の予復習が必要。						
教科書	随時指示する。							
参考書	随時指示する。							
成績評価の方法および基準	レポート50%、口頭試問50%							
その他履修上の注意事項	試験やレポート等に対し、講義の中での解説等のフィードバックを行う。 カリキュラムマップのDP1が、この科目と本専攻の学位授与方針との関連を示している。							